関西自然保護機構会誌 *24*（*1*）：*59－60, 2002*

近畿地方から絶滅した植物　11

村　田　　源

Extinct plants from Kinki District, Japan. 11. Gen Murata

レンリソウ

Lathyrus quinquenervius（Miq.）Litw. マメ科。

川岸などの草地に生える多年草。茎は高さ30～80 cm になり，３稜で細い翼があって直立する。葉は互生して１～３対の小葉があり，羽軸の先端は凸起または巻きひげとなる。巻きひげは分枝しない。小葉はやや硬くて立ち上がり，長さ２～６cm，幅４～10 mm，両端とがり，若い時には短軟毛がある（北村・村田，1963）。花は紫色，1.5～２cm あり，葉脈から出た長い柄の先に４～８個つき，５～７月に開く。

深山や幽谷に生える珍草ではなく，堤防ややや湿った平地の草地に生えていたが，近年日本ではごく稀にしか見られなくなった。分布は本州，九州，朝鮮半島，中国大陸東北部，東シベリアにまたがっている（大橋，1982；中国科学院，1998）。

近畿地方では京都府以外に全く記録がない。京都府下では亀岡市年谷川堤千本松で津軽俊介が1961年６月２日に採集（標本 No.1675），竹内敬によって同定されて京都府草本誌（竹内，1962）に初めて記録された。

年谷川沿いの道は，高槻，茨木方面から亀岡を経て愛宕山や周山方面に抜ける古くより利用されていた道で，特に亀岡付近の年谷川は，亀山城の東南を守る堀の役割をも果たしていたと考えられる。亀岡市の三宅町と篠町柏原から保津川にいたる迄の両岸にはマツ並木（おそらくクロマツと思われる）があり［千本松］と呼ばれ，さながら丹後の天の橋立に似て亀岡盆地に浮かぶ「野橋立」とも呼ばれたという（亀岡市，1996）。このマツ

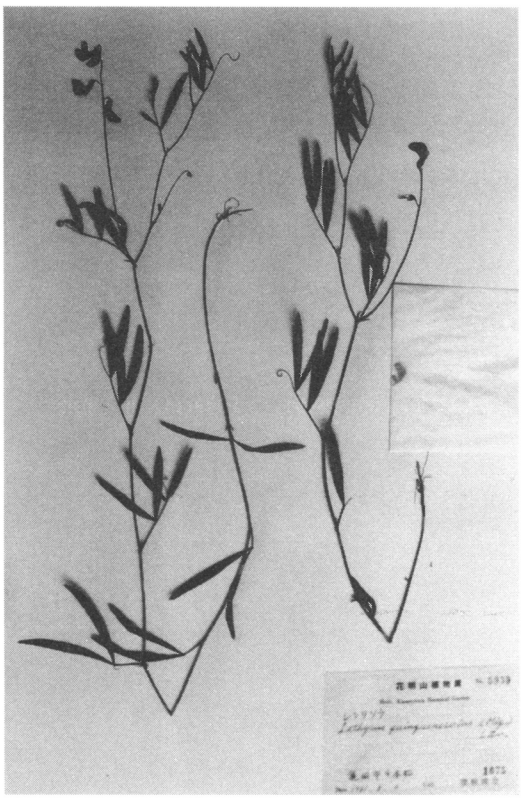


図１． レンリソウ Lathyrus quinquenervius（Miq.）Litw. 亀岡市千本松，1981. 6. 2. 津軽俊介採集の標本，大本花明山植物園にて村田源撮影.

並木は戦後年谷川と保津川の合流点付近が現在のように改修されるまでは残っていて，亀岡の名木314－315頁にも，撮影日不詳として写真が掲載されている。このマツ並木は現在全く残っていないが，津軽氏の言によると昭和36（1961）年レンリソウの発見当時は，堤防は既に改修されていたが，マツは数本一部に見られ，ツルフジバカマ，ワレモコウなども残っていたという。

昭和39（1964）年にもほぼ同じ所で採集された標本（津軽1964.6.16. No.1676）も共に大本花明山植物園に保存されている。その後レンリソウに関する近畿地方での確認情報はなく，亀岡市でも見られなくなったので現在では近畿地方から絶滅したと判断されている（レッドデータブック近畿研究会，2001；京都府，2002)。

レンリソウ，ツルフジバカマ，ワレモコウなど路傍の草地にあった多年草は，アジア大陸東北部に広く分布しているが，日本では近年急速に絶滅または生育地が減少しており，大陸系の遺存植物として注目される．現在日本における絶滅危惧植物の中でも植物地理学上重要な位置を占めている（村田，2001)。

レンリソウが近畿地方で亀岡市にだけ残っていたのは「千本松」の歴史と深い関係があると考えられ，現在里山で絶滅が危惧されている多くの種と共に，人間の営力が遷移の進行を人工的に食い止めて，生物多様性の保存に寄与してきた具体的なよい例であると考える。

引用文献

大橋広好．1982．マメ科．佐竹ほか（編）日本の野生植物Ⅱ：185－212．平凡社．東京．

亀岡市（編）．1996．亀岡の名木，亀岡市．

北村四郎・村田源．1998．原色日本植物図鑑草木編Ⅱ（改訂60刷）．保育社．大阪．

竹内敬．1962．京都府草木誌，宗教法人大本．亀岡市．

中国科学院（編）．1998．中国植物志，第42巻第2分冊．科学出版社．北京．

村田源．2001．近畿地方から絶滅した植物9．関西自然保護機構23（1）：79－80．

京都府（編）．2002．京都府レッドデータブック．京都府環境企画課．